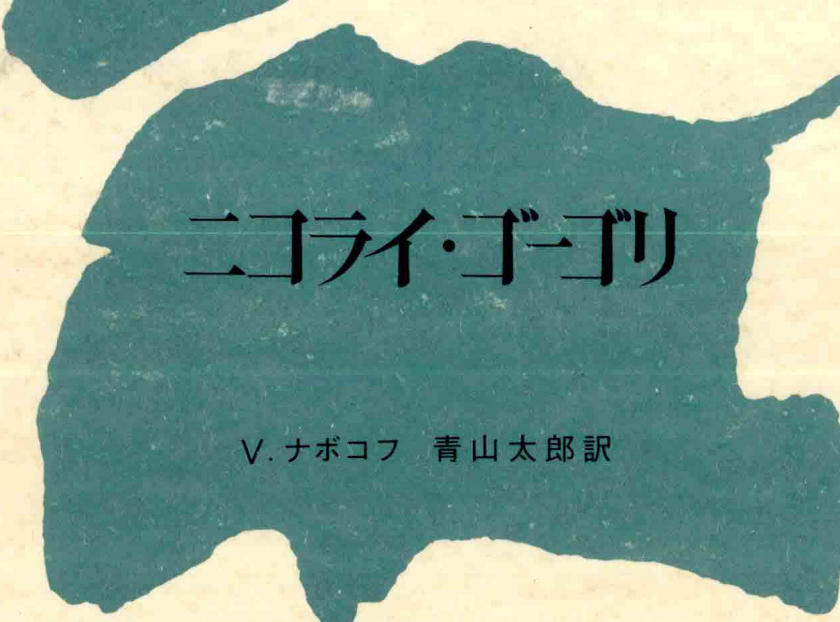
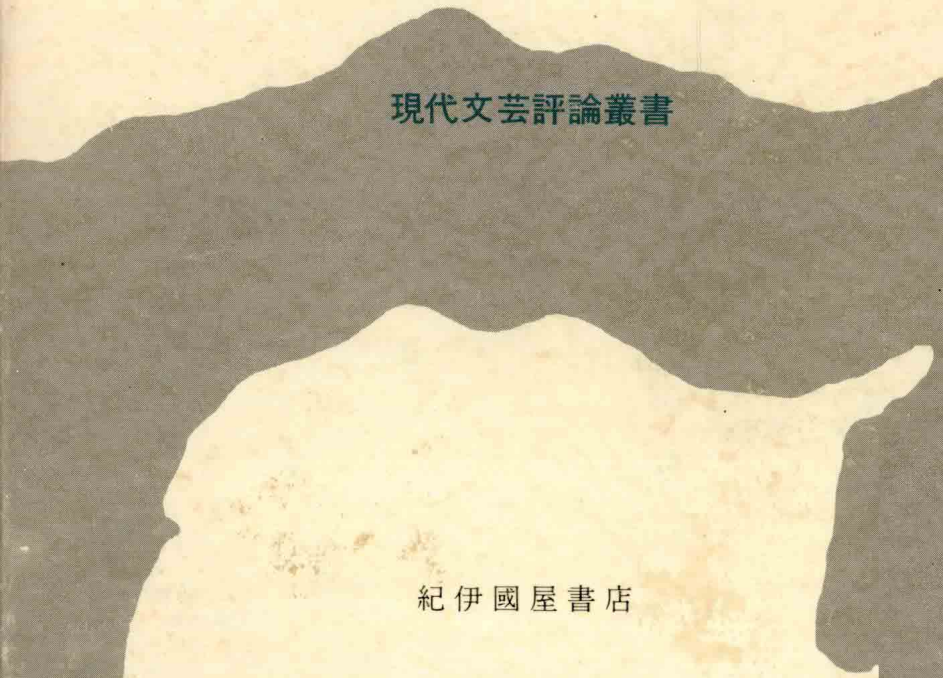




ニコライ・ゴゴリ

V. ナボコフ 青山太郎訳



現代文芸評論叢書

紀伊國屋書店

ウラジーミル・ナボコフ
青山太郎 訳

ニコライ・ゴーゴリ

紀伊國屋書店

著 者

Vladimir Nabokov

1899年ベテルブルグでロシア貴族の家に生まれる。革命の勃発とともにヨーロッパに逃れ、1923年ケンブリッジ大学を卒業。ドイツ及びフランスでの文筆活動を経て、1940年アメリカに移住し、以後アメリカで執筆。『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』（1941年）、『ロリータ』（1955年）、『アーダ』（1969年）など著作多数。蝶類採集家としても知られる。

訳 者

あお やま た ろう
青 山 太 郎

1938年東京に生まれる。早稲田大学露文科卒。現在同大学大学院。訳書にチュコフスカヤ『魔屋』、シニャフスキー『短篇小説集』、『エッセイ集』（共訳）（以上勁草書房）、アンネンコフ『同時代人の回想三巻』（現代思潮社）などがある。

ニコライ・ゴーゴリ

定価 1000 円

1973年 2月28日 第1刷発行



発行所 株式会社 紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3の17の7

電話 (354) (代表) 0131

振替口座 東京 125575

出版部 東京都千代田区五番町12番地

電話 (263) 4914~5(編集)

(261) 0857(営業)

郵便番号 102

印刷 文栄印刷
製本 橋本製本所

落丁・乱丁の際はおとりかえいたします

目次

一	死と青春	五
二	政府の亡霊（『検察官』）	四
三	われらがミスター・チチコフ（『死せる魂』）	三
四	教え導く者	二
五	仮面の神化（『外套』）	一
	ことわりがき	一
	年譜	一
	訳者あとがき	一
	索引	一

だめだ。もうこれ以上もちたえる力はない。まったく、なんてことをしやる！ 連中はおれの頭に冷水をかけるのだ！ おれの言うことなぞどこ吹く風で、見向きもしなければ、耳を傾けもしない。おれが連中に何をしたら？ なぜおれを苛む？ この哀れなおれにどうしろと言うのだ？ おれが連中に何をしたら？ おれは何も持ち合せちゃいない。もうだめだ。おれには連中の拷問を何もかも耐え忍ぶことはできない。頭はがんがんにして、悉皆がおれの周りを回っている。助けてくれ！ 連れ出してくれ！ 旋風のような駿馬のついたトロイカをくれ！ 馭者よ手綱をとれ！ 鈴よ鳴れ！ 駿馬よ高く駈けろ！ この世からおれをさらってゆけ！ どんどん駈けろ、なんにも見えなくなるところまでゆけ。見ろ見ろ、眼の前を空が逆巻き、星が遙か彼方でまたたいている。月影照らす黒々とした樹々の森が飛んでゆく。鳩色の霧が足下に棚引く。霧の中で弦が鳴る。片側は海、もう片側はイタリアだ。そら、ロシアの茅屋も見えてきた。遠くに青くかすむのは、おれの家だろうか？ 窓の前に腰掛けているのはおふくろだろうか？ お母さん、あなたの哀れな子供を助けて下さい！ その痛む頭に涙を注いで下さい！ 連中はこんなにもあなたの息子を責め苛んでいる！ 哀れな孤児をあなたの胸に抱き締めてやって下さい！ この世に彼のための場所はないのだ！ 全てが彼を追い立てる！ お母さん！ あなたの病める息子を哀れんで下さい！…… ところで、アルジェリア総督の鼻の下に、瘡があるのを御存知か？

一 死と青春

一

ニコライ・ゴーゴリ、ロシアがかつて生んだものとも奇妙なこの散文詩人は、一八五二年三月四日、木曜の朝八時少し前、モスクワで息をひきとった。四十三歳になんなんとしていた。この驚くべき世代に属する他のロシア作家たちが概して皆馬鹿馬鹿しいほど若死していることを考え合せば、かなりの年令と言える。自ら企てたハンガー・ストライキ（彼の病的なメラニコリーはこれによって悪魔に對抗しようとしたのだが）に由来する完き肉体的消耗は遂に急性の脳貧血を（おそらくは同時に、衰弱による胃腸炎をも）惹き起し、また彼の受けた治療、すなわち強力な下剤の服用と瀉血は、マテリアと栄養不良によってすでに著しく損われていた身体組織の死を早めた。彼をあくまで並みの狂人扱いしようとする悪魔のように精神的な二人の医者は、彼らより聰明ではあるが敢えて手を出そうとしない同僚たちの恐慌をよそに、患者が未だ保持しているなにがしかの健康をなんとか立ち直らせるべく努める代りに、先ずその狂気を徹底的に矯正直そうとした。ほぼ十五年前、腹にピストルの弾をくらったプーシキン、便秘症の小児が受けるにふさわしい治療を受けた。ドイツ人やフ

ランス人の二流どころの開業医が、当時は医学の權威と見做されていた。のちに優秀な一連の内科医を生むロシア学派は、未だ形成途上にあつたのである。

破格のラテン語を口走り、巨大な灌腸器を振り回して *Malade Imaginaire* のまわりにひしめき合う物知りぶつた医者たちは、突如咳き込んだモリエールが役者たちの立ち騒ぐ舞台の上で血を吐くに及び、滑稽であることをやめる。ゴーゴリの哀れな弱りきつた肉体が忍ばねばならなかった、グロテスクにも乱暴な治療のことを読むのはおそろしい。その間彼自身は皆にひたすら自分をそつとしておいてくれと頼み続けたのである。誤診に加うるにシャルコ方式の明かな先どりをもつてしたドクトル・オーヴェール (*Auvers* あるが *Hovert*?) は、患者を熱い風呂に沈めたまま頭に冷水をぶっかけ、しかるのちベッドに寝かせて半ダースの丸々太った蛭で鼻を吸わせた。患者はそのみじめな肉体(腹に手を当てれば、背骨に触れるほどであった)が深い木の浴槽に沈められる間、呻き、弱々しく身をもがいた。裸のままベッドに寝かされた時彼はがたがた慄え、蛭を取り除けてくれるようひっきりなしに懇願した。蛭は鼻から垂れ下り、口に入りこみ(蛭をとってくれ、どけてくれ、と彼は嘆願した)、彼がそれを掃いとうろとあまりじたばたするので、屈強なオーヴェール (*Auvert* あるが *Hauvers*) の助手がその両手を押えつけていた。

この場面は不愉快でもあり、わたしにとって有難くない人間臭さを帯びてもいるが、ゴーゴリの天才が有する奇妙にも肉体的な側面を明かにするためには、今暫くこれに拘泥する必要がある。腹は彼の小説のヒロインであり、鼻は二枚目である。かつて彼の「もつとも高貴な内的器官」であつた胃、今やこれが言うなれば消失し、またその鼻孔には悪魔がぶら下がっているのだった。死に先立つ数カ月間のすこぶる徹底した断食は、以前

彼の胃が有していた驚くべき能力を破壊してしまった。かつてこの小柄な瘦せつぼちほど多量のマカロニを嚥み下し、多数のチェリー・パイを平げうる人間はいなかったのである（彼が『検察官』の中でやはり瘦せつぼちのドブチンスキーとボブチンスキーを「ちょっとした太鼓腹」の持主に仕立て上げたことを、思い出さないわけにはゆかない）。彼の大きな鋭い鼻はすこぶる長く、よく動いたから、若い頃はこの先端と下唇をくっつけて食屍鬼のような顰め面をするのが得意であつた（彼には百面相の才があつた）。この鼻は彼の外的身体部分のうちもつとも鋭利にして本質的なものであつた。それはあんまり長くて尖つていたので、「どんな小さな嗅煙草入れにも指の助けを借りずに入りこむことができた。もちろん、何らかの爪はじきがこの闖入者を撃退しない場合の話」（ある若い婦人に宛てたゴーゴリの手紙の一節。茶目振りはそのせいである）。われわれは彼の作品のいたるところでこの鼻のライトモチーフに出会ふし、また匂いと嘔と酈の描写を彼ほど好んだ作家はほかにちよつと見当らない。あれこれの主人公たちは、言うなれば、手押車に載せた自らの鼻を前方におし立てて物語の中へ入ってくるか、スターンのスローケンバージアス物語における異邦人のように闖入して来る。嗅煙草の躁宴がある。『死せる魂』のチチコフは彼が涙をかむ時に発する注目すべきトランペット音と共に読者に紹介される。鼻は雫を滴らし、うごめき、愛撫されたり粗雑に扱われたりする。ある酔つ払いは他の酔つ払いの鼻を鋸で挽こうとし、月の住民たちは（ある狂人の発見によれば）鼻である。

この鼻意識は遂に短篇『鼻』を生むにいたつた。これぞかの器官に捧げられた真正正銘の頌歌である。フロイド学説の信奉者なら言うでもあろう、ゴーゴリの本末顛倒した世界にあって人間は逆立ちしており（一八四一年、ゴーゴリが至極冷静に言明するところによれば、パリで彼を診察した医者たちは一致して彼の胃袋が逆

さについていると言った、それゆえ鼻と、或るもうひとつの器官の位置と役割は互に入れ替っているのだ、と。「幻想が鼻を生んだのか、それとも鼻が幻想を生んだのか」、これはさして重要ではない。ゴーゴリが鼻に寄せる誇大な関心は彼自身の鼻が異常に長かった事実に基づくことをしばし忘れ去り、ゴーゴリの嗅覚主義を、——さらには彼自身の鼻をも、——広くはカーニバル流のあけすけなユーモアに、狭くは鼻をめぐるロシアのユーモアに関連した文学的トリックと見做すほうが、はるかに道理に適っているとわたしは思う。われわれは鼻であしらったり、鼻を明かされたりする。鼻をめぐる幾百にのぼるロシアの諺・格言に比べたら、ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』に出てくるかの有名な鼻談義なぞものの数ではない。われわれはがっかりして鼻を下げ、勝ち誇って鼻を上げる。もの憶えの悪い人間には鼻に刻み目をつけるよう忠告し、敗者は勝者に鼻を拭われる。何か多かれ少なかれ剣呑な、鼻先に迫った出来事が問題となる場合には、時間の尺度として使われる。われわれは他のいかなる国民にもまして、誰かの鼻をつかんで引き回したり、誰かを鼻と共に置き去りにしたり（訳註・ロシア語で騙す、愚弄するの意）といった表現を好む。まどろむ人間はこくりこくりやるのではなく、鼻で釣りをしているのであり、ヴォルガに橋をかけるほど大きな鼻、一世紀来伸び続けているような鼻という言い方もある。鼻の中がむずむずするのはよい前兆であり、鼻の頭に面皰ができるのは近く碗飯振舞にありつけるしるしである。ロシアでは人の鼻に蠅をとまらせる作家は皆、ユモリストとして名声を馳せるのがならいであった。若い頃の作品でゴーゴリは機械的にこの安易な方法を採用したが、円熟期の作品にあってはこれにその風変りな天才独特の調子を賦与した。特記さるべきは、そもそのの始りから、あるがままの鼻が彼の頭の中では（全てのロシア人にとってと同様）なにかしら滑稽なもの、目立って突き出たなもの

のか、その所有者に完全には属さないものか、同時に（この点フロイド説を認めることになるが）グロテスクにも格別に男性的なものかだったことである。ゴーゴリが可憐な処女の描写にあたりその顔の卵のような滑かさに固執するさまは、ほとんど痛々しい。

ゴーゴリの長い感じ易い鼻が文学の内に（新たな *frisson* を生むにいたる）新たな匂いを嗅ぎあてたことは確たる事実である。ロシアの諺が言うとおり、「いちばん鼻の長い者がいちばん遠くまで見る」のであり、ゴーゴリはその鼻孔で世界を見ていた。彼の若年の作品にあつては「フォークロア」と呼ばれる安価な既成服店から借りてきたカーニバル衣裳の一部にすぎなかったかの器官が、彼の天才の完き開花に及んでそのもつとも強力な同盟者と化したのである。説教者たらんと努めることで自らの天才を破壊した時、彼はちょうど（短篇『鼻』における）コワリョフのように、自らの鼻を喪失したのだった。

鼻孔にびっしり吸いついた厭わしい毛足類を取り除けようと空しくあがいている瀕死の男、（一目撃者の報告する）この哀れにも感動的な場面うちに、なにかしらおそろしく象徴的なものがあるのはこのためである。彼が生涯を通じてぬらぬらした生きものやちよろろする生きもの・爬虫類に対する格別の嫌悪感に憑かれていたこと、この嫌悪感が一種宗教的基底を有していたことを思い合せるなら、この時彼が何を感じていたか想像できる。悪魔の特徴を人種地理学とのかかわりにおいて科学的に記述する試みは未だなされていない。ロシア産悪魔の主要特徴をここでごく手短かに述べるなら次のごとくである。ゴーゴリが主として出会ったのは、悪魔は悪魔でも、未だ落着かぬ幼少期にあつて元気に跳びはねている「チョールト」というやつで、これは並みのロシア人にとって、いじけた外国人、ドイツ人の、あるいはポーランド人かフランス人の細い脚をして、

絶えず身を震わしている、緑色の血をした小鬼、何かしら言い表わし難い嫌悪感をそそる（“гаденый”）、こせこせした下劣な（“подленький”）存在である。これを潰した時の感じは吐き気と快感の入り交ったものだが、その黒い物体が身を震わせてのたうち回るさまはあまりに忌わしいので、素手でこの仕事を遂行しうる人間はこの地上には一人もない。どんな道具を使おうと、嫌悪感は電撃のように伝わってきて、この道具を生ま身の肉体そのものと化せしめる。瘦せた黒猫が毛を逆立て背を丸めた姿、喉をひくひくさせている何か無害な爬虫類、さらには誰かとるに足らぬちんぴらの細っこい手足とまともに相手を見ようとしぬい眼差（この男は、ほかでもない、瘦せているがゆえに、ちんぴらである）等は、それらが有する「チョコレート」的特徴によってゴーゴリを苛立たせた。彼の悪魔がロシアの酔っ払いたちの見るものと同じであったことは、彼が自らと他に課した宗教的体験の価値を貶しめかねない。ほかに鱗や爪やはては割れた蹄をもった、風変わりであるとはいえ無害な、小さな神々はいろいろあるが、それらはかつてゴーゴリの眼にとまったことがない。子供の頃彼は飢えた臆病な猫を締め殺し、埋めたことがある。これは彼が生来残酷だったからではなく、哀れな動物の柔いすべすべした肌ざわりに胸がむかついたからだだった。ある晩彼がブーシキンに語ったところによれば、彼がかつて目にしたもっとも面白い光景とは、燃える家の灼熱した屋根をぎくしゃく跳ね上りながら渡ってゆく牡猫の姿であった。たしかに、本来なら自分がそれでもって人間を苦しめるはずの道具立ての中で、苦悶のあまり踊りはねる悪魔の姿は、地獄恐怖症のゴーゴリの目に絶妙にも滑稽なパラドックスと映ったに違いない。アクサーコフ家の庭でバラを摘んでいた時、たまたま手の甲で黒く冷たい毛虫に触れた彼は、叫び声を上げて家へ駆け戻った。スイスで彼はまる一日陽の当る山の小道を縫めぐり、蜥蜴を打ち殺して歩いた。この時彼の使

用したステッキは、一八四五年ローマで撮った銀板写真に見える。それはすこぶる瀟洒な代物である。

二

彼はいつもペンをとる手の細っそりした指に、象牙の握りのついたステッキを（ちょうどペンのように）持ち、斜め前を向いて写っている。長いよくとかした髪は左側で分けてある。感じのよくない唇の上には、細いきつちりした口髭があり、大きな尖った鼻はこの顔全体の鋭い造作とよく釣合っている。古い活動写真に見られるロマンチックな主人公たちのそれにも似た眼のまわりの暗い隈が、彼の凝視する眼差に、凹んだ、いささか「憑かれた」ような表情を与えている。彼は広い折襟のフロックコートをまとい、変ったステッキを着込んでいる。もしも過去のくすんだ写真が突然その色彩を燃え立たせるようなことがあれば、われわれはこの暗緑色のチョッキにオレンジと紫の斑点があり、さらにところどころ紺色の水玉が奇妙な具合に散らしてあるのを見分けることができよう。このチョッキは全体として見れば、ある種の外国産爬虫類の皮膚にそっくりである。

三

少年時代？　とり立てて言うほどのことはない。誰でも罹る病気に罹った。お多福風邪、猩紅熱、*puerilis grippus*。虚弱な、絶えず身を震わせている二十日風のような少年で、汚れた手、脂じみた髪をし、耳からは膿を滴らせていた。いつでもべたべたするボンボンをしゃぶっており、級友たちは彼の使った本に手を触れることを避けた。ウクライナのネーシンで学校を終えたのち、何か仕事を探しにペテルブルクへ発った。首都への到着は悪い風邪のおかげで台無しになった。鼻が凍傷で感じなくなってしまっただけに、この風邪はいつも不愉快であった。ほぼ三五〇ルーブルが直ちに新しい服の購入に支出された。少なくとも、母親に宛てた恭敬この上ない手紙のひとつによればそうである。とはいえ、後年ゴーゴリが好んで自らの過去の周囲に織り上げた伝説のひとつによれば、彼がペテルブルク到着後最初にやったことは、プーシキン訪問であった。もちろんまだ面識はないまま、彼はこの大詩人の熱烈な礼讀者だったのである。大詩人はまだ寝ていて会えなかった。「へえ、きつと一晩中お仕事をしとられたんでしょうね」とゴーゴリは畏懼と共感をこめて言った。「たしかにお仕事にやらない。——とプーシキンの下僕は答えた——一晩中カルタをしていた、というほうが正確だろう」。

いたって取留めのない就職運動が始り、そのところどころに金を無心する母親宛ての手紙が挿まる。彼はサンクト＝ペテルブルクへ詩をいくつか携えて来ていた。そのうちの一篇は長い朦朧たる代物で『ガンス・キョーヘルガルテン』と題され、もうひとつはイタリアに関するものであった。

わたしの心はこれを慕って嘆く

天国にまごう喜びの土地

そこでは華麗な愛が春の芽をふく

これらの詩行は疑いもなく作家自身の春の芽をふく段階に属するものである。とはいえ、ところどころ目にとまる詩行がないでもない。「雪の国からやって来た、燃える心の旅人」とか、「太陽のもと、波はまどろみつづ語る」とか。

長詩『キューヘルガルテン』は適度にバイロン風なドイツの一学生に関する物語で、奇妙なイメージがふんだんに出てくるのは、作者が墓場と月光のドイツ小説を読みすぎたせいである。例えば、

白い経帷子の死者が

墓から出て伸びをする

そしてわが身の骨に積る埃を

重々しい身振りで拭う ブラヴォー！

この最後の突飛な間投詞は、若きゴーゴリの陽気なウクライナ気質がドイツ・ロマンチズムに勝っていたことをうかがわせる意味で、注目に価する。この長詩についてはこれ以上とりたてて言うことはない。先に引

用した愉快な死者は別として、それはこの上なくみじめにして完き失敗であった。長詩は一八二七年に書かれ、一八二九年に出版された。かくも多くの同時代人たちによってその韜晦癖を非難されているゴーゴリも、この度だけは、不器用な筆名（V・アロフ）の背後に隠れ、事の成り行きをこわごわうかがっていたからとて咎めだてされることもあるまい。結果は完全な沈黙と、次いで雑誌『モスクワ報知』に現われた短い辛辣きわまる批評であった。ゴーゴリと彼の忠実な下僕は書店へ駈つけ、残った部数を全て買い占めて焼いた。かくしてゴーゴリの文学経歴は、ほぼ二十年後に幕を閉じる時と同じ作品焼却によって始まったのである。どちらの場合も、従順ではあるが事態の何たるかを頓と理解しない農奴がこれを手伝った。

サンクトルベテルブルクでは何が彼を魅了したか。数知れぬ店の看板である。ほかには？ 道行く人々が独り言を言い、歩きながらも「身振り手真似を交え小声でぶつぶつ言っている」事実である。この種の事柄を迎っていつて、のちの作品にふんだんにばら撒かれている看板のテーマや、『外套』のアカーキー・アカーキエヴィチの内に圧縮された「ぶつぶつ言ってる歩行者たち」を発見することに興味を抱く人もあらう。こうした連想はいささか安易にすぎ、それゆえおそらくは虚偽である。印象がよき作家を作るのではない。よき作家自らその年少期に印象を育み、のちにそれらの印象をあたかもかつて現実存在したもののごとくに使用するのだ。一八二〇年代末のサンクトルベテルブルクの看板広告がゴーゴリ自身によってその手紙の中に描かれ、繁殖をとげているのは、彼の母親が知っている「地方都市」とは正反対な「首都」の象徴的意味を、彼女に、そしておそらくは彼自身の想像力に、伝えんがためであった（看板の魅力的なことでは「地方都市」も「首都」にひけはとらない。『死せる魂』の冒頭に出てくる青い長靴、組合せた巻布、金色のパン、その他諸々の擬っ